

北陸新幹線 加賀温泉駅駅舎 デザインコンセプト



加賀市

目次

I 駅舎デザインコンセプトの目的と位置付け	1P
II 加賀温泉駅の現況と課題	4P
III 加賀温泉駅周辺に求められる機能	7P
IV 北陸新幹線加賀温泉駅駅舎デザインコンセプト	9P

I. 駅舎デザインコンセプトの目的と位置付け

1 駅舎デザインコンセプトを策定する目的

加賀温泉駅は、加賀市へ来る多くの観光客等が最初に到着する場所であり、また、市民にとっても交通の拠点であるとともに、交流の場としても、多くの市民が集まる場所です。

新幹線駅舎が、加賀市の玄関口としてふさわしい、賑わい、交流、溜まりの場となることを目的としています。

2 駅舎デザインコンセプトの位置づけ

(1) 加賀市の位置づけ

○加賀市は、石川県の南部に位置した 305.87 k m²の都市であり、東は小松市、西はあわら市に接しており、古くから大聖寺藩の城下町として、北国街道沿いの商いの街として栄えてきた。

○藩政期からの行政の中心地である大聖寺や三つの温泉地など 6 つの主要エリア（観光拠点）のほか、加賀温泉駅周辺の新しい市街地などが分散している。

○広域的には、金沢・能登との連携軸のほか、中部縦貫自動車道を通じた飛騨方面との連携軸の接点にあたり、北陸新幹線開業により、広域的な連携が課題となる。

○加賀市は民間研究機関「日本創成会議」が公表した試算で消滅可能性都市の 1 つに該当するなど、人口減少が深刻な状況である。こうした将来予測のなか、新幹線開業を契機として、交流人口の拡大や定住促進など加賀市全域の活性化につながる必要があると考えられる。

(2) 上位関連計画の位置づけ

【第一次加賀市総合計画後期実施計画（加賀市地域共創プラン（H27.1））】

- ・首都圏を中心とした観光誘客を促進するため、「加賀ていねい」をコンセプトに観光戦略を推進
- ・豊かな自然や食材、文化を融合した「おもてなし」のこころで、観光戦略を推進

【加賀市都市計画マスタープラン（H23.4）】

- ・加賀温泉郷の玄関口となる加賀温泉駅周辺は公共交通の結節機能を強化
- ・本市の顔として人の集う場としてふさわしい都市景観の形成、都市のシンボルとなる空間形成

【加賀市観光戦略プラン（H26.3）】

- ・平成29年度の達成目標として、観光入込客数214万人（平成26年度比36万人増）を目指す。
- ・加賀温泉駅前のインフラ整備、温泉情緒を感じる景観形成、観光案内機能の更なる強化

【加賀市まち・ひと・しごと総合戦略（H27.10）】

- ・加賀市の基幹産業の柱は「製造業」「宿泊業・飲食サービス業」「医療・福祉」であり、雇用の確保や生活環境の改善など、総合的な観点から施策を講じること、人口減少に歯止めをかける。
（課題解決に向けた基本目標）

- ① 加賀市に仕事をつくり、安定した雇用を創出
 - ・企業誘致の推進、伝統工芸の担い手確保、首都圏戦略強化
 - ・インバウンド観光の推進
 - ・市内回遊性の向上対策
 - ・MICE・目的ツアー誘客

- ② 加賀市への新しい人の流れをつくる
 - ・地元企業や大学等と連携したU.Iターン対策
 - ・移住・定住・交流の促進（移住体験ツアーの実施）

- ③ 時代に見合った地域をつくり、安心な暮らしを支える
 - ・人口減少・高齢化に対応した定住環境の整備
 - ・生活・地域密着型サービスの充実、質の高い医療・福祉環境の確保

【加賀市ガーデンシティ構想推進プラン（案）】

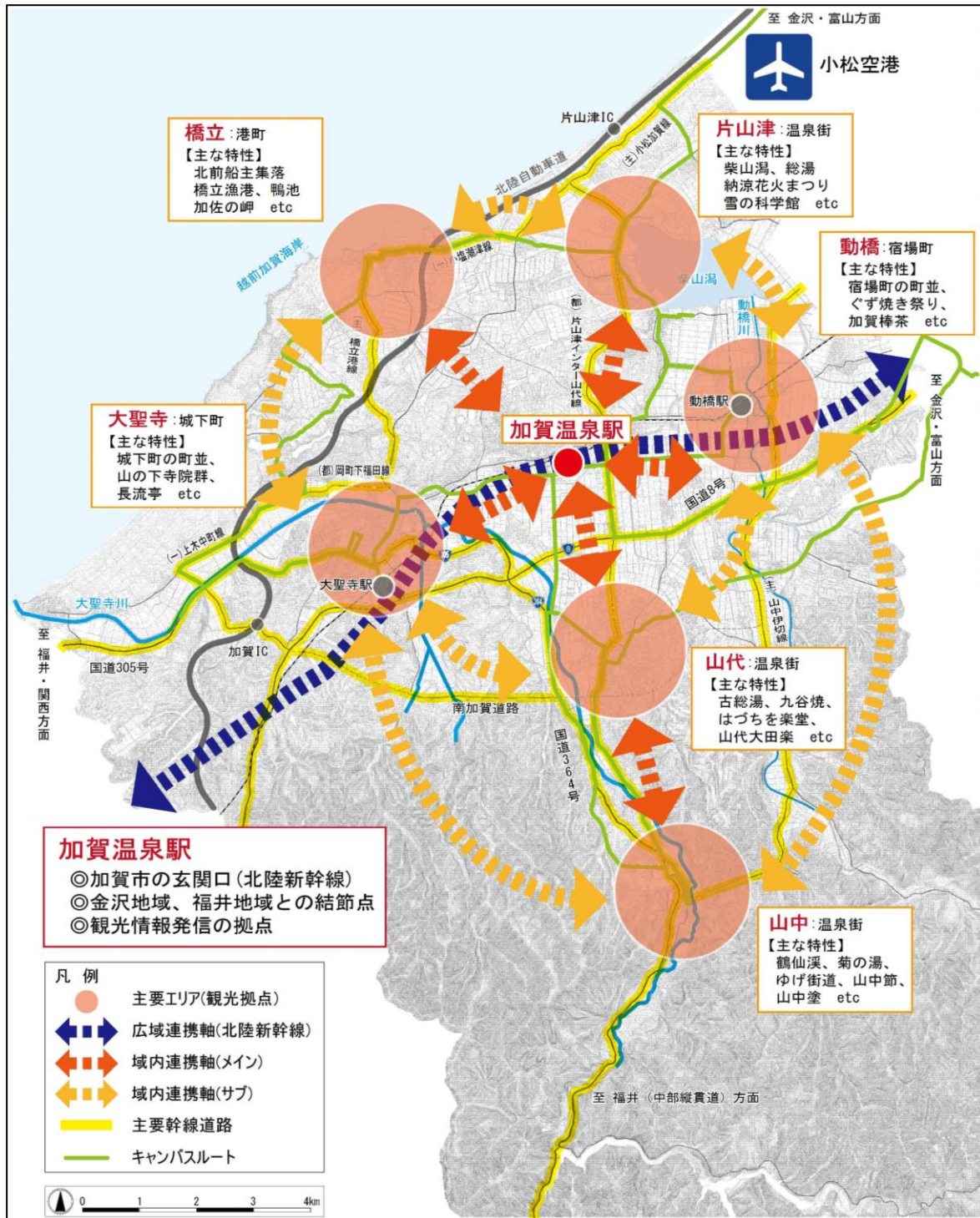
テーマ「ひろげよう 暮らしのみどり もてなしのまち」

・メリハリのある風景づくり【骨格づくり】、もてなしの風景づくり【温泉地等の観光地】、地域を魅せる風景づくり【眺望（今ある緑を活かす）】、暮らしを楽しむみどり【意識啓発、情報発信】、みんなでひろげるみどり【連携体制・活動】の5つの方針に基づく施策を展開する。

（主な施策展開）

- ① 加賀温泉郷の玄関口にふさわしい魅力づくり
（加賀温泉駅周辺の景観整備）
- ② 風景の骨格となる緑の連携軸づくり
（風景の軸となる幹線道路の並木の充実や沿道景観の魅力づくり）
- ③ 温泉街のもてなしを感じる風景づくり
（温泉街の店舗先等を主体とした、通りの花飾等の推進 等）
- ④ 歴史的町並みのもてなしを巡る風景づくり
（神社や水路などの地域資源をテーマとした緑化の推進）
- ⑤ 地域の風景を体験する道づくり
（山並み等の特徴的な風景を望む道路環境の整備 等）
- ⑥ 地域の風景をつなぐ水辺づくり
（柴山潟や動橋川、大聖寺川を中心とした水辺空間における桜並木の創出）

■ 加賀市の将来都市構造概念図 ■



Ⅱ. 加賀温泉駅の現況と課題

1 現況

(1) 加賀市の観光動向

・加賀温泉郷への観光入込客は、186 万人/年（H25）となっている。全体として微減傾向（前年度比 7% 程度の減少）であるが、片山津温泉、山中温泉が増加傾向にある。

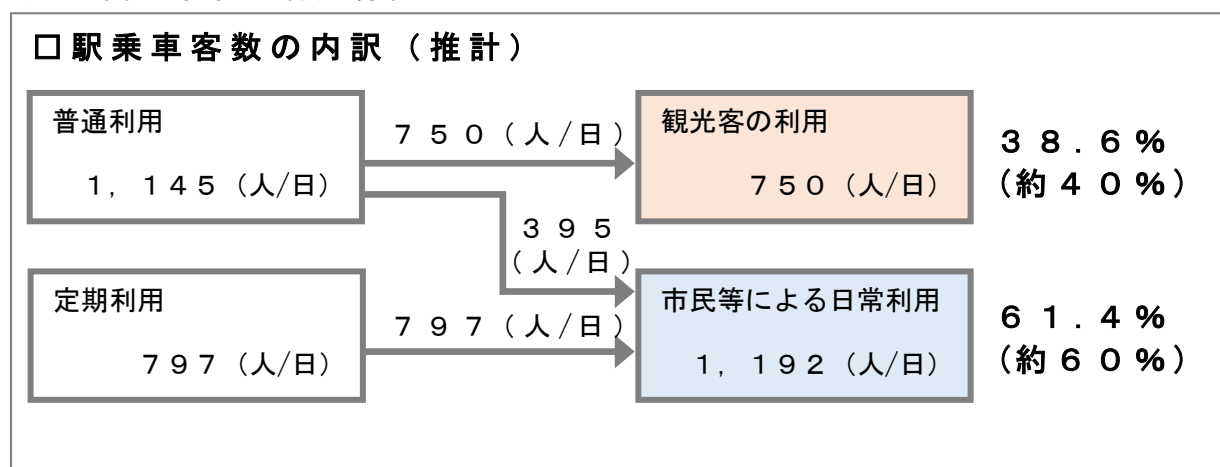
H27 年度においては、1～7 月までの実績を踏まえると、前年度比 10% 増となっている。

・温泉入込に対し、北前船の里資料館（約 15,000 人：H26）、九谷焼資料館（約 40,000 人：H26）、中谷宇吉郎雪の科学館（約 30,000 人：H26）といった温泉以外の主要観光施設の入込は少なく、観光回遊の足となる CANBUS は、年間約 110,000 人（H25）の利用があるものの、過去 8 年間で約 40% も利用客が減少している。加賀市来訪者の平均周遊箇所数は 1.09 箇所であり、回遊されていない（加賀市観光動態調査 H26 年度による）。

・加賀市の来訪者のうち、北陸三県以外からの入込客は 33.1% であり、多くが県内及び隣接地からである（加賀市観光動態調査 H26 年度による）。

・加賀市観光戦略プラン（H26.3）においては、平成 29 年度の達成目標として、観光入込客数 214 万人（平成 26 年度比 36 万人増）、観光消費額 460 億円（平成 26 年度比 77 億円増）としている。

(2) 加賀温泉駅の利用特性

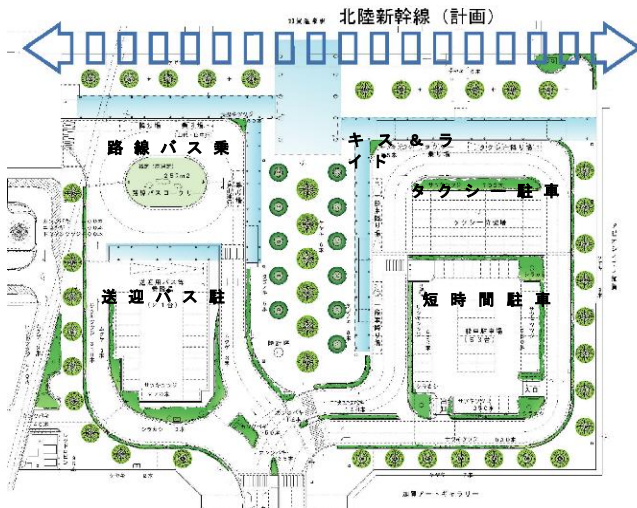


(3) 駅周辺の現状

■ 駅南口広場の諸元

○現在の駅南口広場は、平成2年度の計画時の新幹線乗降客数予測に基づき規模を決定している。

□ 駅南口広場平面図 □



駅前広場施設		バース数	面積
路線バス	乗車	2 バース	370 m ²
	降車	1 バース	
	予備	2 バース	
タクシー	乗車	3 バース	1,000 m ²
	降車	3 バース	
	駐車場	49 台	
自家用車	停車	6 バース	1,800 m ²
	駐車場	54 台	
送迎バス	駐車場	21 台	1,110 m ²
歩道			3,120 m ²
車道			4,430 m ²
広場空間等			5,170 m ²
駅前広場総面積			17,000 m ²



■ 駅周辺の現状

- CANBUS 停留所が広場外に設置されており、来外者にとって分かりづらい。
- 観光バス駐車場がなく、観光機能として十分でない（温泉地を抱える他駅は3台分以上確保）。
- 温泉送迎バスはピーク時に16台の利用。
- キスアンドライド車両のピーク時の滞留は、駅南口側で最大22台、駅北口側で最大6台。
- 広場内短時間駐車場の利用率は約40%、駐輪場の利用率は約30%。
- パーク&ライド駐車場（時間貸駐車場）の利用率は約70%。
- 駅南北地下通路の歩行者の安全確保が課題（ピーク時間帯約440人の通行有り）。
- 広場中央部の環境空間が十分に利活用されておらず、また、樹形について評価が分かれるものとなっている。

2 課題

■上位関連計画での位置付け

- ◎首都圏を中心とした観光誘客、豊かな自然や食材、文化を融合した「おもてなし」のこころ
- ◎観光入込客数 214 万人（H29 年度目標）
- ◎雇用の確保や生活環境の改善による人口減少の歯止め（消滅可能性都市に該当）
- ◎企業誘致、市内回遊性の向上、U. I ターン対策、移住・定住の促進、質の高い医療・福祉環境
- ◎視認性の高い緑化に重点的に取り組む（ガーデンシティ構想推進プラン）

■加賀市の地域特性

- ◎江沼三山、白山、柴山湯、鴨池等の自然環境
- ◎豊かな自然を背景とした城下町（大聖寺藩）、温泉街、港町（橋立の北前船等）、宿場町といった多種多様な歴史を持つ地域
- ◎これらを背景とした「九谷焼」「山中漆器」等の工芸文化を継承、総湯を中心とした宿屋群の伝統的な温泉街の構造を継承

■加賀市の観光動向

- ◎加賀温泉郷の入込客数 186 万人/年（H25）
- ◎北陸 3 県以外からの入込は約 30%（H25）
- ◎温泉入込は、H27 年度において新幹線効果により前年度比 10%増加
- ◎温泉以外の主要観光施設の入込が少ない。回遊していない。（平均周遊箇所数 1.09 箇所/人）
- ◎周遊の足 CANBUS が過去 8 年で約 40%の利用減

■加賀温泉駅の利用特性

- ◎通勤通学は横ばい、定期以外の利用が減少傾向
- ◎利用客の内訳：観光客 40%、一般利用客 60%

■駅南口広場の計画経緯と現状

- ◎H22 を計画年度として 17,000 m²に拡張整備。
- ◎観光需要への対応、駅北口広場の整備、駅南北通路の再整備、加賀市らしい広場空間のデザインが必要。

加賀温泉駅周辺整備の課題

■位置づけ・地域特性からの課題

- ①加賀温泉駅は、市内主要 6 エリアをネットワークするコンパクトシティの要（公共交通ネットワークの拠点）として、新幹線による観光誘客の拠点（インバウンド観光等）として、必要な機能の導入が求められる。
- ②人口減少に歯止めをかけるため、観光推進や医療・福祉環境の確保が求められる。
- ③加賀市特有の自然・食材・文化を融合したハード・ソフト両面での「おもてなし」空間づくりが求められる。
- ④市の玄関口として、多種多様な歴史を持つ地域（大聖寺・橋立・動橋など）とのネットワークの拠点として、観光情報とともに、「九谷焼」「山中漆器」などの工芸文化の情報など、歴史・文化の情報発信が求められる。
- ⑤江沼三山などの美しい山並み眺望の保全や、緑の拠点としての新たな整備を図ることが求められる。
- ⑥北陸新幹線沿線（金沢など）との連携を図り、観光客やビジネス客の誘客や交流促進が求められる。

■観光動向・駅周辺整備経緯からの課題

- ①新幹線効果により増加が見込まれる観光入込について、温泉街と他観光地（橋立・大聖寺など）の連携強化を図り、回遊性を高めることが求められる。
- ②CANBUS など、市内回遊のための交通手段となる 2 次交通への乗り継ぎの利便性や、観光地との快適なアクセスが求められる。
- ③医療センター（H28.4 開院）や市美術館、大規模小売店舗との機能連携が求められる。
- ④区画整理地の住宅地の環境保全や、低未利用地の市街化促進など、定住促進に繋がる施策が求められる。
- ⑤広域観光の拠点駅としてだけでなく、在来線駅・生活の足としての利便性を向上させることが求められる。

■駅の利用特性・駅南口広場の計画経緯からの課題

- ①多くの観光客（駅利用者の約 4 割）に対応した利便施設（都市施設）の整備が求められる。
- ②駅の一般利用者（駅利用者の約 6 割）の利便性向上のための北口新設等の機能改善が求められる。
- ③整備後約 20 年を経た駅南口広場の機能更新や駅南北方向の連携強化が求められる。
- ④パーク＆ライド需要への対応が求められる。
- ⑤加賀市らしい駅・駅前空間の充実（加賀らしい新幹線駅舎、駅舎との一体的な広場デザイン）が求められる。

Ⅲ. 加賀温泉駅周辺に求められる機能



都市施設（休憩・待合・交流・観光案内施設）の導入機能（案）

- ・都市施設において、「温泉街・四季の風景」「九谷焼・山中漆器」「海・山・里の幸」をキーワードとする機能を配置し、他には無い魅力・加賀市らしさを演出。

歴史・自然 「温泉街・四季の風景」

- 温泉郷など加賀市や周辺市町の観光案内情報をワンストップで提供（対面式観光案内所など）
- 温泉街の歴史や自然環境などの加賀市の特徴をPRするための情報発信コーナーを設置（加賀温泉郷ミニミュージアムなど）

※温泉街等の観光情報発信（ミニミュージアム）



※加賀市の自然・美しい四季の風景を演出



事例 観光案内所＋歴史・文化のミニ博物館（熊本駅）



伝統 「九谷焼・山中漆器」

- 「伝統工芸のまち加賀」の新たな拠点となるステーションギャラリーを設置し、工芸・特産品の展示・販売を行う。建物内装に使用する。
- 九谷焼美術館や加賀市美術館と連携を図り、一流の伝統工芸品を展示・紹介する。

※九谷焼・山中漆器の展示販売、内装への使用



※九谷焼美術館・加賀市美術館との連携



事例 伝統工芸品の展示販売施設（新高岡駅）



食 「海・山・里の幸」

- 山・里・海の新鮮な食材が味わえる施設を整備し、来訪者に加賀市の良さを体感してもらう（地域の食材や加工品を味わえる飲食施設など）
- 加賀市の特産物や加工品を購入できる施設を整備（特産物の販売施設など）

※海の幸

ズワイガニ・甘エビ・メギス・ハタハタ・岩ガキ…等



※山・里の幸

加賀ブロッコリー・加賀梨・鴨料理・加賀地酒…等



事例 地域食材の飲食／地酒コーナー（長野駅）



IV. 北陸新幹線加賀温泉駅駅舎デザインコンセプト

- ・基本キーワード「加賀市らしさ」「存在感」「アピール力」「市民に愛される」を元に、デザインコンセプトを策定。

デザインコンセプトの考え方

「加賀市らしさ」

- 白山や江沼三山の山並み、おだやかな丘陵と調和する景観形成を図る。
- 城下町、宿場町、港町、温泉街といった多種多様な歴史を感じさせる。
- 加賀藩（大聖寺藩）の気風を背景に形成された茶道や能楽などの芸術文化、古九谷の伝統様式、湯治文化による山中塗漆器などの工芸技術を感じさせる。

「加賀市らしさ」 加賀市歴史文化基本構想（H23.3）より

- ①白山を基層とする加賀門徒の篤い信仰文化
- ②北前船の繁栄をもたらした日本海交流文化
- ③近世の領国経営と多様な嗜みをもたらした大聖寺十万石文化
- ④総湯の伝統と「もてなし」の心を継承する温泉文化
- ⑤交流と伝統が生み出した「ぐち」なもののづくり文化
- ⑥個性豊かな大聖寺川・動橋川流域の生活文化

「存在感」「アピール力」

- 古九谷、美食、格子といった細やかで丁寧（加賀ていねい）な素材の活用により、加賀市の伝統文化の美しさ・奥深さを感じさせる。
- 年間 200 万人を誇る加賀温泉郷の玄関口としての求心力。
- 温泉の湯・レディ・カガのもてなしなど、「ぬくもり」を感じさせる。
- 加賀五彩、九谷五彩（緑・黄・紫・紺青・赤）、白山の純白、山代の紅殻格子といった色彩で加賀市の自然、歴史、文化を感じさせる。

「市民に愛される」

- 100 年後も継承される不易な存在の駅として、加賀の伝統文化を身近に感じられ、市民が誇れる存在とする。
- 駅周辺の丘陵地の緑や、白山、田園風景との景観の調和を図り、優しさと癒しを感じられる。
- 長流亭（茶室や庭園）、笏谷石、瓦屋根など、地域に根ざした素材を採用することで、歴史文化に対する市民の意識を醸成する。

デザインコンセプト

『加賀の自然と歴史、文化を見せる駅』

～ほっと安らぎ、粹にかぶく駅～

～古九谷、山中の挽物を活かした駅～

～地域を花と緑でつなぐ、シンボルとなる駅～

副題について

“ほっと安らぎ”は、加賀市へ来た観光客が、加賀市の海、山、平野を見て、ほっと気持ちが落ち着くこと、温泉に入ってくつろぐことを表しています。また、おもてなしにより、観光客にほっと安らいでもらおうという意味を持っております。

“粹にかぶく”は、加賀温泉駅に降り立った時、はっとするような感覚、また、ワクワクするような感覚を感じられるよう、駅の構内および駅前広場を粹に非日常的な空間とすることを表しています。

“古九谷、山中の挽物を活かした駅”は、世界に誇れる古九谷、そして卓越した挽物技術によって完成する山中漆器を駅の構内、駅前広場に活用することにより、市民にとって加賀市を加賀温泉駅を誇れる存在とすることを意味しています。また、観光客に対し加賀市が古九谷の発祥地であること、そして山中漆器の挽物技術をアピールする場とすることも表しております。

“地域を花と緑でつなぐ、シンボルとなる駅”は、山代、片山津、山中の3温泉だけでなく、大聖寺、橋立、動橋などそれぞれ多種多様な魅力を持った地域を花や緑でつなぐことにより、加賀市の周遊性を高めること、そして、加賀温泉駅がその花や緑のシンボルとなり、市民や観光客が花や緑に囲まれ、集い、交流できる場となることを表しています。